

WEEKLY

ツーリズムビジネス専門誌
週刊トラベルジャーナル

2014年1月6日発行(毎週月曜日発行)
第51巻第1号通巻2883号
1964年9月17日第三種郵便物認可

50th
ANNIVERSARY

TRAVEL JOURNAL

Japan's No.1 Travel & Tourism Business Magazine

観光立国を支えるすべての人々に向けて

2014
1/6・13

合併号



ツーリズムの 近未来

渡航自由化50年目のイノベーション

高齢者大国の 前線から

vol.
010



文・篠塚恭一 (SPIあ・える倶楽部代表取締役)

個を追いやる 現代社会

景 気の回復感とともに振り込め詐欺など、特殊詐欺の被害が過去最悪となっている。被害額はすでに400億円を超え、毎日1億円以上もの個人資産が詐欺で騙しとられた勘定になる。被害に遭う多くは女性高齢者だから、その暮らしや住まい方に問題があることがうかがえる一方、次から次へと新手の手口を編み出す犯人グループには憤りを越えて感心させられてしまう。

お叱りを承知で言えば、彼らほど年寄りのことをよく知る者はいないだろう。犯罪が知られば、すぐに別の手口を編み出し、またダメになると次の商品を開発する。そのたびごとに新しいマニュアルをつくり、教育され、夜討ち朝駆けの営業努力も惜しまない。しかも、粗利9割の高収益体質というから、犯罪でなければ、これほど成功した高齢者ビジネスもないだろう。

民間シンクタンクは、今後、40代と70代のおひとり様女子が増加して市場が拡大すると予測しているが、旅行現場ではすでに20年前からそうした傾向が顕著になっていた。かつて一般団体の観光旅行といえば、夫婦や家族連れが多く、旅行会社は1人参加を敬遠した。旅館など、訳ありで万一自殺でもされたら困ると一人旅の客は泊めないところがほとんどだった。しかし、21世紀を迎えたころから変化が起き、もはやおひとり様に驚くこともない。かつての大家族制は核家族へ移行し、やがておひとり様スタイルへと細胞分裂を終えた。

今、関係者が集まり25年に向けた理想の高齢者住宅モデルをつくろうと研究しているが、プライバシーを確保しつつ共用スペースのシェアで経済性と両立を図ろうとしている。加齢による身体変化を予測し、認知症にも配慮した集合住宅を建築デザインで形に表そうと、来年には着工するだろう。

先日、温泉をユニバーサルツーリズムに活かさないかと聞かれたが、温泉は外国人にも人気の健康資源だから、各国の大使夫人で女子会をつくり、温泉の良さを美容と絡めて和食と一緒に自国へ持ち帰ってもらったらどうかと答えた。もちろん会長には米国大使のケネディさんが最適だが、東京五輪のプレイベントなら実現不可能とは言い切れない。

ユニバーサルツーリズムは、コンセプトが「いつでも、どこでも、誰にでも」だから、難しいと感じている。なぜなら、多様化した成熟社会の消費者個人は、「今だけ、ここだけ、あなただけ」という自分を特別扱いしてくれることを好むので、普遍性を謳うユニバーサルはこれからのシニア層にはそぐわない。さらにユニバーサル商品は、大量消費による低価格では採算がとれない。ユニバーサルツーリズムとパーソナルサービスの間にある誤解はまだぬぐえていない。

超高齢社会の進展は、これまで集団にいたものが加齢とともに個に追いやられる社会となり、地域からはじき出された個人は、隔離阻害されている。個と集団の乖離をかつては市町村が埋めてきたが、合併続きで巨大化した今の基礎自治体では、寄り添うようなサービスも難しい。そうした中にある高齢者の孤独と不安という心の隙間に詐欺師がつけこんでいる。

25年、第1回目の実現を目指す火星定住計画に20万人が応募したというから、宇宙が旅行先になる日もそう遠くない。市場は常に進化を続けている。ビッグデータの分析を駆使すればその傾向はわかるが、極まった細胞分裂の先で起きている個の課題を解決することはできないと思う。



しのづか・きょういち ● 91年にSPIを設立し、現職就任。95年トラベルヘルパー（外出支援専門員）の養成開始、介護旅行事業に取り組み。06年NPO法人日本トラベルヘルパー協会を設立し理事長に就く。